

# 科学者ベドウの研究とブリテン諸島周縁地域をめぐって

香 戸 美智子

## 〈Summary〉

In this research note, the scientific approach to understand the human populations or races in the nineteenth-century British Isles are examined. Special focus is cast on the work of J. Beddoe, a physician, physical anthropologist, and ethnologist, and those of his contemporaries. Physical anthropology was flourishing in the middle of the century in Britain as well as Europe, and various measures were conducted and instruments were invented. Beddoe relied on the colour of hair and eyes for his investigation, and advocates some relatively high ratio of these darkneses in certain areas. Some discussion concerning the fringe regions such as the Celts are taken up to see the ideas or attitudes of the scientists towards the population in the British Isles.

## はじめに

ヒトの集団への探求は現代社会においても課題の一つであるが、ヴィクトリア期の英国においては、ヒト集団をめぐり様々な科学的議論が展開された。本研究ノートでは、当時の科学者がヒトの集団に対していかなる考察を行っていたかを探る。主に医師であり自然（形質）人類学者、民族学者でもあったジョン・ベドウ（John Beddoe, 1826–1911）を中心にブリテン諸島周縁地域にも焦点をあて検討する<sup>1)</sup>。

これまでの人類学史の研究を辿ると、ヴィクトリア期は英国の人類学の生成・発展における一つの画期と評されてきたことがわかる（Stocking Jr. 1987）。本稿で取り上げるベドウも、その時代に生きた人物である。しかしながら、これまでベドウに関して焦点を当てた研究は、非常に乏しい。歴史的史料として第三者によるいくつかの評伝（Gray 1911; A.C.H. 1911; *Anonym* 1911; James 1912）やベドウ自身の数々の著作などが残されている。英国人類学史研究の中では一部分としてベドウについて述べた部分がある（Stocking 1987; 1971; Stocking <ed.> 1984; Stepan 1982; Barkan 1992; Curtis 1968; Murry 2014）。例えば、ストックキングは「最も卓越した英国の形質人類学者たち」（の一人）（1987: 66）、カーティスは「民族学分野において量的方法論を使用したパイオニアであった」（1968: 71）と指摘しており、またマリイはベドウの活動について「同時代の人種科学」（2014: 184）、スティパンは「直接あるいは間接的に人種研究を形作った英国における主要な科学者たち」（の一人）（1982: xix）と評している。しかしこれらの叙述は主としてベドウに関心を寄せたものではなく断片的なものである。本稿は、このような中でベドウ単独に焦点を

あて、限られた史料を基に彼の人物像や事跡、遺された著作などを辿る。大英帝国ヴィクトリア期におけるブリテン諸島のヒト集団をめぐり、ベドウはいかなる研究を行い、あるいは、科学としての形質人類学の発展を推し進めようとしたのか、また当時の進化という新しい科学的知見と如何に自己の研究を融合させようとしたか、社会との関わりで葛藤も含めケルト周縁地域のヒト集団へのまなざしについても検討する。

まずここでは、英国におけるヒトの集団に関する既知の観念を科学的視点から考察しようとした学術協会の黎明期について辿っておこう。英国では1843年にロンドン民族学協会(Ethnological Society of London)が設立された。これは1837年設立の先住民保護協会(Aborigines Protection Society)が母体となったものであり、クエーカー教徒や福音主義者を中心とする人道主義に基づいたものであった。19世紀初頭に奴隷交易が廃止され(1807年)、奴隷解放令が1833年に発効し、英国では多くの知識人にとって奴隷制反対が関心事でもあった(竹沢2007)。当時の民族学(ethnology)は新しい概念であり、医師ジェームス・カウルズ・プリチャード(James Cowles Prichard, 1786-1848)を中心に研究組織として設立された同民族学協会は、18世紀以降のカール・フォン・リンネ(Carl von Linné, 1707-1778)などによる博物学の科学的分類法とは異なり、当時の新科学として、むしろ解剖学や生理学、歴史学、言語学、考古学などによる統合的な学問を目指した<sup>2)</sup>。しかしながら、設立後10年近く経つにつれ形質人類学と考古学による新しい学術的潮流が台頭し(Stocking 1987: 246)、そのメンバーの一人であったジェイムズ・ハント(James Hunt, 1833-1869)は、同民族協会の書記を務めた後に、1863年、ロンドン人類学協会(Anthropological Society of London)を設立した。これは19世紀半ばにパリ人類学協会を設立(1859年)した外科医・解剖学者であるポール・ピエール・プロカ(Paul Pierre Broca, 1824-1880)の影響を受けたものであり、同様の協会はその後ワシントンやマドリッド、ベルリン、モスクワなどにも設立された。主に計測による自然科学としての学、解剖学や博物学、統計学を中心としたが、民族学や考古学、言語学、先史学なども含めた人間に関する科学、人類学を目指そうとした。プロカやハントらを始めとして、ヒト集団に対して頭示数、顔面角、頭蓋容積などの計測が進められた。その実証、差異を数値化・可視化するために様々な計測機の発明や実験も繰り返された。この流れの科学者たちは、ステイパンによれば、むしろ「計測者」(Stepan 1982: xix)として位置づけられうる。また特徴の一つとしてヨーロッパの白人と有色人種間の身体的差異と知的精神的差異の関連性を追及し、英国の協会でも奴隷制存続や人種差別をも意図する要素も孕んでいた。ロンドン民族学協会に属すエドワード・バーネット・タイラー(Sir Edward Burnett Tylor, 1832-1917)は、後に文化概念を導入し英国近代人類学を築いたとされるが、この他者支配的傾向には反発していた。同民族学協会にも学術的には博愛主義と科学的志向が共存しており、両協会に所属し活動する科学者も多い中で、組織としての両者の確執は続いた。特に人類単一起源説を掲げる同民族学協会に対して多起源説を唱える同人類学協会は反目を続けた(Stocking 1971)。しかしながら、やがてハントの急死などにより両者は合流し1871年にグレート・ブリテンおよびアイルランド人類学研究所(Anthropological Institute of

Great Britain and Ireland, 以下, 英国人類学研究所), 1907年には現在の王立グレート・ブリテンおよびアイルランド人類学研究所 (Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, 以下, 王立英国人類学研究所) となる。ヴィクトリア期におけるヒト集団に関する探究は, ヒューマニズムと科学的計測志向, 植民地主義, 人種主義, 進化主義などが混ざり重なり反発し合い, 混沌とした中で進められたと言える。

## 1. ベドウの生涯とヒト集団への関心

ジョン・ベドウは, 1826年イングランド, ウスターシャーのビュードリーに生まれ, 幼少期の病弱のため法学を断念し医学に進んだ。ロンドン・ユニバーシティカレッジで医学を修め, 1853年にはエディンバラ大学で医学博士号を取得した。同年に開戦したクリミア戦争に翌年医師として参加した。1857年にイングランドに戻り, ブリストル郊外のクリフトンで内科医を始め, 1862年から1873年までブリストル王立病院 (Bristol Royal Infirmary) に勤めた。病院早期退職後は, 内科医を続けながらも, 自身のヒト集団に関する研究を深めた。ロンドン民族学協会のメンバーであり, その中から他の形質人類学者たちとともにさらに新しい科学を探求してロンドン人類学協会にも所属した。のちに同人類学協会の会長にもなり, 対立し合った両協会の合流へ向けて尽力し, 英国人類学研究所の設立へ導いた。ベドウは, 1870年には英国科学振興協会評議員 (Council of British Association for Advancement of Science [BAAS]), 王立英国人類学研究所の設立後は1889年から1891年まで所長を務めた。このように結果的に, 前節で辿ったヴィクトリア期のヒト集団に関わる三つの学術協会を移動した。後に詳細を述べるが, ヒト集団への研究として主に髪の毛と眼の色, および頭蓋計測や身長などの計測に基づく記述的自然人類学手法を採った。また, 記述だけでなく文化と言語の拡散という観点から歴史的に捉えようともした。関心の対象は主にブリテン諸島のヒト集団であったが, 調査過程でヨーロッパまで広げている。1875年にはブリストル・グローセスターシャー考古学協会の共同設立者の一人となり, 1890年には会長を務めた。1891年頃よりウィルツシャーのストラッドフォード・アポン・エイボンに居を移し1911年に亡くなるまで学術的探求を精力的に続けた。1909年にはウィルツシャー考古学・自然史協会の会長も務めた。晩年は, いつも温かく人を迎え科学の深い造詣を楽しませてくれる「健康な長寿の化身」(Anonym 1911: 316) であったと故人略伝に記されている。

ベドウのヒト集団への関心は20歳ごろから芽生え, イングランド西部の髪の毛と眼の色に関する観察, その後はロンドン・ユニバーシティカレッジでの人類学や人類多起源説に関する講義の受講, エディンバラでのハイランドスコットランド人の研究などにおいても捉えられる(Stocking 1987: 66-67)。また, クリミア戦争後ブリストルの病院勤務になった時に, 英国国民の頭蓋や身体特徴を調査する医師および頭蓋学者・収集家であるジョゼフ・バーナード・デーヴィス (Joseph Bernard Davis, 1801-1881) の研究プロジェクトに関わったことは, 次節にみるベドウ独自の研究への道を開いた。解剖医でもあったデーヴィスは当時の代表的な計測科学者であり頭蓋収集を精力的に行っていた。その他, ベドウのヒト集団への関心に関わる学術的な影響と推

測されるのは、1857年頃、医学研修のためにウィーンへ行き、その後オーストリア、ハンガリー、イタリア、フランスなどを廻り医学と形質人類学の知識を修得していったことである。当時のプロカなどを中心とする学問との接触やヨーロッパの多様な人々の特徴を観察する機会を得た。

## 2. ブリテン諸島のヒト集団と<sup>こくしょく</sup>黒色指数

### 2-1 動機としての内なる移民

1863年に書かれた論文「イングランドにおける推定される暗色髪<sup>こくしょく</sup>の増加する拡散」(“On the Supposed Increasing Prevalence of Dark Hair in England”)では、ベドウの研究の動機が理解される。そしてここに次項に扱うベドウ独自の研究への初期の原型を見ることができる。彼はまず、「科学的ないし非科学的一般論」として、「明るい色の髪はイングランドでは、かつてよりも、次第に一般的でなくなりつつある」(Beddoe 1863: 310)と現状を述べる。赤、黄色、その他明るい色の髪の毛を、サクソン人、デーン人、ノーマン人の祖先が持つものと示唆し、自身がイングランドのプリストルに居住する立場から、「イングランドの大きな町、より文明化された人口が多い地域では、ここしばらく、移民の絶え間ない流れを受け入れつつある」として、その移民とは、「アイルランド、ウェールズ、ダムノニア、ハイランド、その他ケルト地域」からであって、そこでは、「暗い髪の毛の色に満ちているのだ」と語っている (Beddoe 1863: 311)。当時のブリテン諸島イングランドでは大英帝国の繁栄のもと工業化・産業化が進み、都市人口が急激に増えつつあった。すなわち、イングランドに住むベドウにとって、海外の遠隔地の大英帝国植民地の住民だけが異民ではなく、ブリテン諸島内の異民、イングランドへの移民という、国内の他者としてのヒト集団への関心が動機であったことがわかる。

### 2-2 「余暇」としての15年間の後

後世において版を重ねたベドウの著書として、『ブリテンの諸人種』(*Races of Britain*, 1885)が挙げられる。これは1868年にウェールズのアイステズヴォッドで懸賞論文「イングランド国家の起源」(“The Origin of English Nation”)に応募し受賞した原稿を基とする。受賞時は成果としてまだ出版には機が熟していなかったとして出版せず、1872年にプリストル病院を早期退職した後、約15年間の調査研究を経て集大成させたものである。この期間をベドウは医師専門職から人類学者への本格的な転身を楽しんだかのように「余暇」と称している。

この成功裏の仕事は、…数値による帰納的方法論を、ブリテンと西ヨーロッパの民族学へ適用することに捧げた、15年間の偉大な余暇の成果物である。専門家の審査員(故ストラングフォード卿)にとっては満足のいくものであったが、その成果は、私にとって出版にはまだ機は熟していなかったように思われた。それ以降、資料に多くを追加し、機会が可能な限りの観察を非常に多く蓄積してきたので、今、私の人類学の仲間たちと一般の人々に対し、

私の結論と意見を提供することができる (Beddoe 1885: preface, v)。

### 2-3 試料としてのデータ

ベドウの著書の基盤となる調査は、形質として主に髪の毛と眼の色、その頭蓋や頭形、身長など身体的特徴により行われた。それらの試料はどこから入手したのだろうか。原形となった1868年までの調査では、クリミア戦争後1857年に帰国した後から1862年以降のプリストル王立病院で診察した患者たちの観察調査が試料となった。特に髪の毛と眼の色の調査を進めた。また先述のように、プリストルで医師として働きながら、当時頭蓋の収集調査を精力的に行っていたバーナード・デーヴィスの「協力者、助手および共同研究者」(Stocking 1987: 66)となったことが、ベドウのこの研究を大きく前進させた。英国国民の身体的特徴について質問票によるデーヴィスの全国調査の追跡調査により約200名からのデータを入手できた。それらは主に自らの患者のデータを収集した医師たちからのものであった。このようにして、特に髪と眼の色という点で、ベドウは自身で「『被験者の協力なしで』非常に多くの人々を観察できた」(Beddoe 1885: 5)と述べ、他の頭蓋などの試料と比較し研究手法の容易さを語っている。

余暇後の1885年の著書では試料が膨大な量に達している。デーヴィスとの形質的調査結果を継続して頭蓋などの挿絵を掲載するとともに、ベドウ独自の眼と髪毛の色の調査に関しては、最も多くが、プリストルでの患者のデータ、そして、ベドウ自身が15年間に行った「個人的な観察」データが使用されている。ヒトの集団ごとの顔の挿絵も挿入されている。個人的な観察は、主としてブリテン諸島のかなりの地域にわたるが、一部、西ヨーロッパにも及ぶ。また、ベドウもことわっているが (Beddoe 1885: chapter XIII), それらを第一試料とすると、第二の試料として軍関連の膨大なデータを使用したことがわかる。直接的には、軍目録で、「軍隊からの脱走兵、より少ないが海軍からの脱走兵、市民兵の演習からの脱走兵」(Beddoe 1885: 143)に関する詳細な情報を示す『ヒュー・アンド・クライ』(*Hue and Cry*)から13,800名のデータが使用された。ただ「この種の統計における不完全さ」(Beddoe 1885: 143)を認識することから、自身がメンバーであり長をも務めた英国科学振興協会の人体測定委員会の報告書も取り入れ、また、それ以上に膨大な量の軍隊の統計に関する一連の報告書も使用した。新兵部局の軍医を「優れた慎重な観察者」(Beddoe 1885: 143)と評し、毎年21歳男子の市民兵統計資料を15年にわたり入念に確認していったことがわかる。このようにして試料が収集され、次に見るようにヒト集団への科学的定式が構築される。

### 2-4 「<sup>こくしよく</sup>黒色指数」(the Index of Nigrescence)

ベドウは、「黒色指数」(the Index of Nigrescence)という定式を創り上げた。この指数は人間集団に関する指数である。当時ヨーロッパで一般的になりつつあったレツィウスの頭蓋指数(cranial index)を意識してのものであった。すでに1860年代の英国では、自然(形質)人類学が急速に学問領域としての一定の地位を得ており、ヨーロッパと同様にスウェーデンの人類学者

アンデルス・アドルフ・レツィウス (Anders Adolph Retzius, 1796-1860) の考案 (1842 年) した頭蓋指数 (頭示数) の使用が一般的であった。これは頭蓋の横径 (最大幅) を縦径 (最大長) で割って 100 倍した数値で、例えば、長頭型 70.0~74.9, 中頭型 75.0~79.9, 短頭型 80.0~84.9 などとされた<sup>3)</sup>。

ベドウは色に固執した。眼の色を明暗の度合いにより「明 light」, 「中間 intermediate」, 「暗 dark」と分類した。第一集団には青, 青みがかったグレー, 明るいグレーの眼が分類される。第二あるいは中間集団には, 暗いグレー, 茶色がかったグレー, 大変明るいヘーゼル (薄茶色) あるいは黄色, ヘーゼルグレー, オレンジから青みがかったグレーになるもの, 緑色のものが, 通常の調査では色が不確実なものとともに分類される。第三集団には, いわゆる黒眼と通常茶色と暗いヘーゼルと呼ばれるものが分類される。一方, 髪の毛の色は, 英単語の色のイニシャル R, F, B, D, N により識別される。「クラス R (Red)」は, 茶, 黄, 亜麻 (淡黄褐色) より赤に近いもの。「クラス F (Fair)」は, 亜麻 (淡黄褐色), 黄, 金, 最も明るい茶色, 赤があまり顕著でない青白い赤褐色。「クラス B (Brown)」は, 多くの茶系色, 「クラス D (Dark)」は, より深い茶色から黒色までを含む。「クラス N (Niger)」は, 幼年期から同じ色を保ち一般的に大変硬い質の漆黒色だけでなく, 幼少期に濃茶色であった人々に生じる強烈に濃い茶色, 成人期に石炭黒色と区別できないものをも含む (Beddoe 1885: 3-4)。

ベドウは調査にカードを使用したと語っており, 長さ約 3 1/2 インチ×幅 1 1/2 インチの手のひらサイズでウェストコートのポケットに入る便利なものであった。カードは, 眼の色 — 明・中間・暗 — により縦に大きく 3 分割され, 各々に 5 種類の髪色 — 赤・金・茶・濃・黒 — に分けられ, さらに男女の性別が上下に設定された。裏面には地域, 日付, 観察者の氏名, その他の詳細が記載されたが, 表面にも地域名を記入する箇所が残された。18 歳以上が成人として分類された (Beddoe 1885: 4)。

髪色の定式すなわち黒色指数は,  $D + 2N - R - F =$  指数であり, 総指数から純指数あるいはパーセンテージ指数が得られる (Beddoe 1885: 5)。暗色 - 明色 = 指数であり, つまり, 「明色はゼロ以下, 暗色はゼロ以上になり, ヒトの集団が白くなればなるほど, マイナス量がより大きくなる。眼の色の指数は中立的な色合いを無視し, 暗色から明色を減じることにより得られる」 (Haddon, 1898: 26)。ベドウは晩年には特に指数は「髪の毛の色のみ」有効としている (Beddoe 1905: 224)。

これらに関してベドウは, 以下のように詳述している。

総指数は, 暗色髪の人数に二倍した黒色髪を加えたものから, 赤と金髪の人数を減じることにより得られる。…この方法によって示されるメラニン性 (melanosity) のより大きな傾向に適切な価値を与えるために, 黒色は二倍される。一方, 茶 [栗] 色髪は中性と見なされる, 実際 B に分類されるたいていの人々は白い肌 (fair-skinned) であり, メラニン種よりも黄色種により近いが (Beddoe 1885: 5)。

以上のように、黒色指数が算出され統計処理がなされていくのだが、定式から黒色が二倍されていることに我々は気づく。ベドウの説明によると、化学物質であるメラニンの度合いに対して適切に価値を与えるために二倍したと述べられている。つまり、彼はメラニン色素の在り方、度合を強調するために二倍したと推察されるが、より詳細で明確な科学的な根拠は明示的ではない。いずれにせよ、このようにして単一の物質を指標としてヒトを集団として構築する道筋が付けられた。

### 3. ブリテン諸島, ケルト周縁地域, および歴史的起源

ベドウは頭蓋や頭形、身長などの身体特徴や黒色指数を使用し、ブリテン諸島の同時代の人種構成およびそれらにより推測されるブリテン諸島の人々の歴史的な起源を明らかにしていった。ここでは、ベドウの著書を中心にその他の著作も踏まえ、彼が提示した事項を辿っておこう。

『ブリテンの諸人種』は全15章から成るが、そのほとんどの章が先史時代からローマ、アングロサクソン、ノルマン征服など、ブリテン諸島への人種・民族の流入およびその移動についての仮説の説明であり、身体特徴や頭形・頭蓋、髪と眼の色の形質的調査から得られた知見から詳細に述べられている。このような章立てから、ベドウの調査目的は、同時代の人種・ヒト集団を同定・序列化するという18~19世紀にヨーロッパで行われてきた植民地主義的人種思想というよりも、むしろブリテン諸島に住む人々（同時代の英国人）の祖先、英国人の人種的起源を希求することの方に重きが置かれていたと言える。1860年代以降ベドウは、ブリテン諸島のこのような歴史を同時代のヒト集団の調査を通じて証明しようとする試みを繰り返した。このような起源の希求は他のヨーロッパ諸国やアメリカ等とは異なり、英国の特殊性を示すものである。英国には、先史からノルマン征服（1066年）に至るまで、ブリテン諸島に複数のヒトの集団の侵入が断続的になされてきた歴史があり、その人種の重層化・複雑化により不確かさが多く、自らの起源やアイデンティティを求める思考が現代までも存在すると考えられる。

ベドウは、第一章冒頭で、彼を「形質人類学における系統的な膨大な観察」に向かわせたのは「ケルト人」の髪の色に関する古くからの議論であるとしている（Beddoe 1885: 2）。ベドウは黒色指数調査で抽出された、黒いヒト集団、ブリテン諸島の周縁地域に住む「ケルト」人についてのどのような認識をもっていたのであろうか。ベドウの著作から彼の考えるケルトの定義をいくつか拾うことができ、主に歴史的な探求心に支えられていることが窺える。「ケルト人種の想像される子孫」として「アイルランド人」とともに、「ブレトン人、ウェールズ人、ワロン人」などが列挙される（Beddoe 1870-71: clxxxii; 1870: 117-131<sup>4)</sup>。また1865年時点では「ケルトとケルティック」という用語の定義に言及し近年のあいまい性も述べている。

人類学においては、化学や他の進歩的な諸科学においてと同様、旧理論の整理や変更は、かつて明確で明白な意味を持つと思われた用語を、あいまいで人を誤らせる用語にしている。ケルトとケルティックという言葉は、初めは有用であったが、現代の科学研究者の心には明

確な考えを伝えなくなってしまった言葉である (Beddoe 1865: 348)。

従ってこのような理由から論文にこれらの用語を頻用することに反対する人々に、どうか我慢してほしいと伝え、これらの語を使用する際の意味として、「古代ガリア、ブリテン、アイルランド、ノリクム、ケルトイベリアにおける共通する人種の要素」(Beddoe 1865: 348)と述べた。同時代のケルトに関する人種論よりも、その歴史的な移動や起源を科学的な知見により明らかにしようとする姿勢が推察される。

著書では試料ごとにに基づきブリテン諸島の詳細な地域データが提示されている。

彼の大きな発見は、地図1に示されるように、暗色の髪の人集団の大多数が、西部地域に発生していることを明らかにしたことである。ブリテン諸島ケルト諸地域とされるウェールズ、アイルランド、スコットランドにおいて黒色指数が高い傾向を示した。イングランドの東部州地域では髪と眼の色の分布は異なる。ただ、イングランド内でもローマ以前にケルトが居たとされるリンカンシャーでは影響を受けており、さらにケルト地域に入るコーンウォールでは非常に高い数値を示している。つまり、ブリテン諸島民の起源とされる先住民は、暗色の髪と暗色の眼であったのである。



地図1. ブリテン諸島の黒色指数 Source: J. Beddoe, *The Races of Britain*, 1885: chap. XIII

このようにケルト周縁地域のヒト集団の「黒さ」が髪の色により抽出された。

もう一つの付随する発見としては、同時代のブリテン諸島のブロンド、すなわち金髪、色白のヒト集団は多くがその起源をアングロサクソンとスカンジナビア人に負っていることである。

また、同じケルト地域でもさらに分化した詳細を調査しており、例えばウェールズでは非常に暗色の眼と髪が広まっているが、アイルランドのそれとは少し異なるとして、「私には、少なくとも二種類の暗色の種があるように思われる。一つはアイルランド人のように、背が高く、グレーの眼と暗色の髪、もう一つは背はより低く、暗いアーモンド形の眼と茶色の髪である」(Beddoe 1905: 236)。さらに同じアイルランドでも東部と西部は異なるとして、「全体として、アイル

ランドの東部の原住民、のちの侵入者の子孫、上流階級、イングランドあるいはスコットランドの名字を持つ人々は、金髪・色白の傾向があり、西部の原住民、先住民、労働者と農民、ケルトの名字を持つ人々は少なくとも髪の色においてより暗い」(Beddoe 1905: 236)と後に語り、アイルランドの中のイングランドとスコットランド系の割合 (1/3) も明らかにした。

また、イングランドではあるがケルト地域とされるコーンウォールについては、最も高い黒色

指数 (20.6) であったが、同時に純粋の金髪・色白型をも示し、「すべてのブリテンの型がコーンウォールに現出」しており、「最も特徴的なものは…セム人混じりのイベリア人であると考ええる…バーナード・デーヴィスは口の厚さと鼻の低さに印象づけられた。これはブリテンのより初期の人種に共通する特徴である」(Beddoe 1885: 259)。「コーンウォールは多分、自由なブリテン戦士にとっての最後の避難所を与えた、西のサクソン族から次第に追いやられた…コーンウォール人は、一般に髪の色が暗く、しばしば眼もそうである。彼らはイングランドの中でも飛び抜けて、最も暗色の人々である。スコットランドのハイランド地方の人々と色彩のあたたかみにおいて似ている」としている (Beddoe 1885: 258-259)。

ベドウによる東部地域とイングランド最南西部における髪と眼の色の分布調査から、後に人類学者のアルフレッド・コート・ハドン (Alfred Cort Haddon, 1855-1940) は起源の結論を次のように導いている。

まず新石器時代に、ブリテンの真の先住民として、「イベリア人、より正確には地中海人種のイベリア人の支脈」が存在し、彼らは暗色髪、茶色眼、他の証拠から長頭の人々であり、イングランド中に拡がり居住していたと推測される。また非アリア人で農耕を営んでいたとされる。次に、馬を繁殖し馬車を駆使する、ケルト語話者の人々がブリテン諸島に侵入してきた。青銅器時代に支配を強めたが、先住民は駆逐されず奴隷となり生存し続けた。そして後に、チュートン人の大群が侵入し、彼らは様々な人種として、つまりフリジア人、アングル人、サクソン人、ジュート人、デー人、古代スカンジナビア人がやって来た。彼らに典型的な形質として、明色の髪と眼、長頭があげられる。その明色長頭の特徴は、暗色の長頭の奴隷の上にはまり込み、一方、目前の、多少とも短頭のヒト集団であるケルト人に対しては大規模に絶滅させたり他地域へ追いやったりした。その結果、現在、主に西部地域にケルト人の人種の特徴が見られ、また、混合人種がより先住であった人々と特徴を共有していると推測される (Haddon 1898: 39-40)。

以上のように、ベドウは黒色指数などからブリテン諸島の歴史的考察を行った。ただ、著書の最終章には「結論および未確定論」と題してさらに新たな推測され得る結論が導きだされると述べられる。

すなわち、上記のようにヒト集団のメラニン性・黒化を軸にブリテン諸島における諸地域の民族の起源が探求されてきたが、一方、「逆流する移住」として現在 (当時) の変化や変質をベドウは以下のように語っている。

明色から暗色への、英国における色型の変化に関して信頼できる証拠の欠如の中で、以下の疑いない事実に依拠することが最善である、すなわち、たいていは暗色髪である、西のゲールとイベリア人種が、現在、逆流の移住によって、ブロンド色のイングランドのチュートン人を押し寄せ圧倒する傾向にある。同時に、婚姻選択、疾患による淘汰、イングランドの上流階級より全般的に暗い職人階級の急速な増加を通して、より暗色型が増加していることによる起こりうる影響を、考慮しておくべきである (Beddoe 1885: 270)。

このようにベドウは、ブリテン諸島の歴史的起源を求めながら、近代化や工業化を意味する主に19世紀後半のケルト諸地域の労働者階級の都市移動に最終章で言及している。イングランド人の黒色が増加し、ケルト人が辺境から戻ってやって来てイングランドの金髪チュートン人(ゲルマン系)を圧倒している。換言すれば、ケルト辺境地域からの人々がイングランドの工業化都市へ溢れるほど入ってくるため、現在(当時)、東部イングランドの田舎地域のみが、「徹底的にチュートニック(ゲルマン系)」であるとしている。このような記述は、本稿第2節で指摘した、ベドウ自身の研究の契機となった「動機としての内なる移民」の主題が、20年以上経たのちに集大成され、ブリテン諸島の人種起源の結論とともに、同時代の「近代」的工業化による人種構成への影響——黒化——をも推論し示唆したものと捉えられる。つまり、ベドウの指数は近代産業化による人口移動とそれによる人口構成の変化、社会の変化をベドウ自身に新たに認識させたと言えるであろう。

#### 4. ヒト集団へのまなざし

##### 4-1 ベドウの論理——縦糸と横糸——

19世紀の形質人類学の多くの知見として多数の頭蓋や身体の測定がなされたが、ベドウは「色」を採用することにより指数を構築した。ここではベドウの論理を検証する。

ヘンリー・クレズウィック・ローリンソン(Sir Henry Creswicke Rawlinson, 1810-1895)がある民族学者の会合で「色は、まったく型の一部ではない」と述べたことに対し、ベドウは、「私は強く異議を唱える」とし、自らの立場を語る。

私は、髪と眼の色の永遠性を非常に高く評価するに至った。もちろん、進化論者にとって、それらを絶対的に永遠と見なすことは不可能である。しかし、人は、私と同様、すぐに以下のように思えるであろう、顕著に同質な種が確立される時はいつでも、その色は、自然選択の諸条件がほぼ同一である限り、同じ状態のままである可能性がある。(Beddoe 1885: 2; 1905: 219)

すなわち、ヒト集団の「色」の全面的な永遠性を主張するのは難しいとしながらも、環境要因による自然淘汰の諸条件が同一であるならば、ヒト集団にとってその色は同様に長く留まるとする。19世紀半ばチャールズ・ダーウィン(Charles Darwin, 1809-1882)による進化論の提起以降、頭蓋などの形質人類学を批判しつつ英国では次第に進化主義が広まりつつあった。進化論とベドウの論理を交差させると、ヒト集団を分類する方法としての「色」の有効性は、色が比較的安定しているからである。「皮膚と髪の色と等温線(isothermals)の間には一般的な一致があり、それは、色が環境要因への反応として起こったことを示すものだからである」が、いったん色が確立すると、それは定着と連続性を保持し、ヒト集団の「型を同定するのに使用が可能」としている(Beddoe 1885: 2)。

この一見矛盾する論理を、ベドウは縦糸と横糸という比喩で語っている。

もし、地理的な位置が縦糸とすると、遺伝、人種そして遺伝的に受け継がれた型は横糸である、そしてその織り糸は、非常に強固で永続的である (Beddoe 1905: 226)。

すなわち、環境要因を掲げながらも、そのヒト集団の特性がいったん遺伝により自然に設定されるとその特性が長く続く。このようにして色の現象は、半永久的なヒト集団の特性を捉え、カテゴリー化される。他の形質人類学者のような人種決定論ではないが、遺伝を前提にした形質人類学に進化主義を接ぎ木した論理とも言える。ベドウは環境要因を重視したが、一方でその長期の永続性から遺伝的特質としてヒト集団と色を捉え、科学的知見を探求していった。

#### 4-2 同時代の科学と社会 — ケルト周縁地域 —

ベドウの調査研究から抽出されたケルトというヒト集団については、他の形質人類学者たちと同様に、彼は人種科学の範疇に入ると解釈されることが多い (Murray 2014; White 2012; Stepan 1982)。ベドウは、先述のように「メラニン性」という科学的指数により、ブリテン諸島では北東から南西に進むにしたがい黒色指数が増加し、アイルランド西部が最も指数が高く、ウェールズの溪谷部やスコットランドのハイランド地域も高く、ケルト周縁地域の黒さを明らかにした。主に歴史への探求心からであった。しかしながら一方、ア priori な人種主義的観念も確かに窺える。例えば、顎の形に関し、アイルランド人の「顎のつきでかた」がより大きいことを観察し、ベドウはこれら「外見上の諸特徴は、我々を、その可能な誕生地として、アフリカを想起させるように導いてくれる。そして、多分暫定的にそれをアフリカノイドと呼んでもよいであろう。…このアフリカノイド型は…」 (Beddoe 1885: 11-12) と述べている。アフリカを誕生地として想起させるとして、ケルトやアイルランド人の人種分類においてアフリカノイド・アフリカ型と名づけ人類の一つの型とした。ホワイトは、ベドウにおけるケルト/アイルランドと「アフリカ・黒人のアイデンティティという連想」が彼をケルトの型と同定させたとし批判している。非白人としてだけでなく黒人として人種化され「ブリテン諸島におけるすべての人々が等しく白くはなく、あるいは同じではなかった」 (White 2012: 44-45)<sup>5)</sup>。その意味でベドウの科学性は同時代人の思考や社会に培われ、それらから自由ではなかったと言える。

このようにしてベドウは当時の人種科学志向の範疇に入りうるかもしれないが、より精査すると、やや距離を置き、矛盾も抱えていたように推測される。これらケルトに関するベドウの見解の位置を探るため、以下、ハントを中心とする当時の典型的な極論を展開した形質人類学者の主張や議論を検討する。

同時代の形質人類学者には、ロバート・ノックス (Robert Knox, 1791-1862)、ジェームズ・ハント、ジョゼフ・バーナード・デーヴィス、ジョン・サーナム (John Thurnam, 1810-1873) などがいた<sup>6)</sup>。先述のように、特にハントを中心として1850年代、ロンドン民族学協会内に考

古学と形質人類学の新しい志向を代表する集団として活動が活発化され (Stocking 1987: 246), 後にロンドン人類学協会の設立につながった。ベドウもこのグループに参加していた。ロンドン民族学協会が人類は共通の祖先を持つという単一起源説を唱える一方, 後にハントが率いるロンドン人類学協会では人類多起源説が唱えられた。形質・身体的差異を計測していく科学はヨーロッパやアメリカにも急速に拡がるとともに, 特に当時の植民地主義思想あるいは奴隷制度をめぐる議論を背景に, 白人と有色人種との間の序列化が科学により推し進められた。

ジェームズ・ハントは医師であり言語療法士であったが, のちにヒトの集団の差異に興味を持ち人類学に転じた。科学と社会の相関を強め, 人道主義や反奴隷制運動に強硬に反対し, 自ら会長になったロンドン人類学協会では 1860 年代, いわゆる科学的人種主義を牽引していった。論文「自然におけるニグロの位置」(“The Negro's Place in Nature”, 1863) を発表し, 人類多起源説を掲げ, それは同時代のアメリカの奴隷制度の擁護にもつながった。英国植民地のジャマイカでは 1865 年にモラント湾黒人農民蜂起が起こり, ハントはその鎮圧に関してイングランド人 (English) の優位性を説き当時の総督を支持した (平田 2004)。雑誌の出版も精力的に行い, 『人類学レビュー』 (*Anthropological Review*) と『民族学協会雑誌』 (*Journal of the Ethnological Society*) の編集統括をした。また, 当時の英国ではアイルランドの自治独立運動が深刻化しており, 19 世紀前半の青年アイルランド党 (Young Ireland Party) の流れから, 1850 年代末にアイルランド共和主義同盟 (Irish Republican Brotherhood [IRB]) が設立され, 独立に向けて運動が激化しつつあった。それに対処するために, 1870 年代頃から 20 世紀初頭にかけてアイルランドに自治を付与するというアイルランド自治法案 (Irish Home Rule Bill) がグラッドストーン (William Ewart Gladstone, 1809–1898) 自由党内閣の下などで模索された<sup>7)</sup>。カーティスによれば, 1860 年代から 70 年に向けてハントの雑誌は「反アイルランドへのプロパガンダに豊富な材料を構成した」(Curtis 1968: 69) とされる。

ハントは, すべての科学的証拠に基づき人間は全体として平等ではなく, ある人種は決して文明化されえないと主張した。英国の政治状況の中で, 彼は特にケルトに関して, 以下に見るように, 師であるノックスの理論を引いて人種論, 科学や社会を論じた (Rainger 1978: 64)。ロバート・ノックスは, 医師・解剖学者であり, のちに人類学の著作を残した。『人間の諸人種』 (*The Races of Man*, 1850) の中で「私にとっては人種, あるいは遺伝的な血統が, 全てである。それは人間に型を刻み込んでいる」とし, 彼は「教条的な人種純粹主義者」(Curtis 1968: 69) であり, 異人種の混血は短命につながると主張した。特にイングランド人, アングロサクソンが最も優れていると考え, ケルト (彼にとってはアイルランドのケルトを指したが) に対して徹底して対立した。ハントは 1868 年の『人類学レビュー』で, 「ケルト人種に関するノックス」 (“Knox on the Celtic Race”) と題してノックス主義を掲載した (Hunt 1868: 175–191)。その時代状況の課題からケルト人種への考察が必要とし, ノックスの見解は, 時に風刺や偏向もあるかもしれないが, 「全体として健全なものであると信ずる」(Hunt 1868: 175) と述べ紹介した。ケルト人種の範囲は広く, 「フランス人, アイルランド人, スコットランドのハイランド人, ウェールズ人」とし

ている (Hunt 1868: 176)。フランスとアイルランドを両極端として取り上げ、前者の文明化された人間はパリで見つけることができるとし、文学、科学、芸術におけるフランス人の優秀性を讃えた。しかし、全体の論調としてはイングランドを中心とするアングロサクソンのケルトに対する優位性を語った。

「気候」という自然環境は、「人間の諸人種の多様性を永久的に変化させることには全く影響を与えない」(Hunt 1868:185)と人種における環境要因を否定した。さらに、社会や政治に関する「諸制度を決定づけるのはまさに、人種である」(Hunt 1868: 184)とし、人種固定・決定論を展開した。「領地、修道院、尼修院、封建制は、どんな人々の特徴をも形成するのではなく、また修正するのでもない。それらは、結果なのだ、原因ではない、…(中略)…それらは人種の特徴を示すのであり——それらはその特徴を形成するのではない」(Hunt 1868: 184)と述べた。一方で、「サクソン」は「憲法に基づいた自由を理解する唯一の人種であり、民主主義的な諸制度を確立できる唯一の人種である」と主張した(Hunt 1868: 183)。つまり、人種が原因であり、諸々の社会秩序はその結果であるということになる。科学に基づく人種が社会や政治機構、諸制度以前に存在し、異なる人種では慎重な統治法が必要とされた。

イングランドにとっての実際にきわめて深刻な問題は、*国家*として、ケルト人種の三つのセクションが今なおその国土に存在することである。つまり、カレドニアンあるいはゲール(the Caledonian, or Gael)、カムリあるいはウェルシュ(the Cymbri, or Welsh)、アイリッシュあるいはエルス(Irish, or Erse)である。そして、いかに彼らを統制するかである(Hunt 1868: 186)。

このように、カレドニアであるスコットランド、カムリであるウェールズ、エルスであるアイルランドへのイングランド国家としての適切な統治法を求めた。ノックスは、もし可能ならば、イングランドの安全性から考えるとルネサンス期のマキャベリの助言に従うべきであるとし、すなわち、去れという排除論にも走る。当時のフェニアン(Fenian)の暴動など実際危機的な事件を目前に、イングランドにとっていかに統治するかを人種の傾向から探ろうとした。

このように、ロンドン人類学協会は形質人類学の興隆を支えながらも当時の政治に深く関わりを持ったが、一方、1860代は同時に、進化論的思考や人種間混合の事実などにより強烈な批判も起こりつつあったことも事実である。生物学者であるトマス・ヘンリー・ハクスリー(Thomas Henry Huxley, 1825–1895)は反論を唱えた。1870年の『人類学レビュー』誌の人類学ニュース欄では「政治的民族学に関するハクスリー教授」(Professor Huxley on Political Ethnology)と題された講演録(「イングランドの人々の祖先と先人たち」(The Forefathers and Forerunners of the English People))が収められている。ハクスリーは「どんな政治的な力点をも、ケルトとアングロサクソンの人種間の区別に当然結び付けるべきとする観念」と戦おうとしたかのようにであった(Huxley 1870: 197)。

遺伝と環境に関し、「人間の特徴は、ある程度、その人が自分で持って生まれた様々な性向に依存する、そしてある程度は、その人が受ける様々な環境に依存する。——時に影響力ある一集団が優位を占め、また時には別の集団が優位を占める」(Huxley 1870: 203)と語る一方、「ここ数年間、人間の自然史に関心のある科学である民族学は、非常に多く実際的な政治と係わってきた」(Huxley 1870: 197)とし、特にケルトとチュートンあるいはアングロサクソン人種間の相違や対立を憂いた。

そして、歴史的詳細を提示し、ケルトとアングロサクソン両者の相違は言語の相違だけであるとした。

英国と同様アイルランドにおいても、現在のヒト集団は、二つの集団から成り立っているという十分な証拠をもって証明される、一つはケルト語を話す歴史上初期からの人々であり、他方は、後から侵入してきたチュートン語話者である (Huxley 1870: 201)。

このようなことから、「科学の問題に関して私の言うことが政治権力を持ついかなる人にも重要であるとするならば、私はその人に、アングロサクソン人とケルト人の違いについての様々な議論は、まったくの偽物であり錯覚にすぎないと信じるよう求める」(Huxley 1870: 203)と述べた。ハクスリーは、環境要因を支持し、遺伝は認めながらも、人種決定論は否定するとともに、人種と科学の議論は政治とは無関係であることを強く主張した。このハクスリーの立場を、ベドウは「人類学と政治：ケルトとサクソン」(“Anthropology and Politics: Kelts and Saxons”)で要約し、「…身体的な諸側面において人種の信奉者であると語った。つまり彼は、身長、頭蓋形、髪と眼の色における相違の遺伝的特徴を認める。しかしもう一方で彼は、精神的あるいは道徳的(心的)な気質の相違の遺伝的な伝達については幾分懐疑的であるように思われる。全ての出来事において、彼は政治に関するそのような遺伝的相違の影響を否定する」(Beddoe 1870: 212)。

ベドウの、形質人類学者たちとの位置関係については、先述の縦糸横糸の論理と同様、微妙であり矛盾も見られる。人種間の相違は政治に影響を与えるかどうかに関し、ベドウは、「我々のほとんどは、骨相学や人相学の主張を科学とは呼ぶことを許さないとしても、形質的な特徴と、精神のおよび道徳的(心的)特徴には、ある一致があることを信ずる」(Beddoe 1870: 212)として形質人類学の立場を擁護する。しかし「前者(形質的特徴——筆者注)において平均的なアイルランド人は平均的なイングランド人と異なっている。したがって我々は、後者(精神道徳的特徴——筆者注)の観点においても、同様に異なっていることを予期すべきである。そして、実際、我々はそれが事実であると気づく」(Beddoe 1870: 212)と双方の連関を語る。

続いてベドウが以下に語る中に、幾ばくかのアンビバランスな言質が捉えられうる。

換言すれば、かなり昔に観察された相違は、現在も相違であり、私が思うに、いまだに存在している——つまり、昔のアイルランド詩人が歌ったように、いかに「忍び寄るサクソン人

はその退屈さにおいて」優れていることか、しかし、ゲール人（ケルト人——筆者注）は美において、恋愛において」（いかに優れていることか——筆者注）。この事実をある程度、形質的な構成に起因するとすることは道理にかなっている。このような事情であるので、市民の大きな諸集団の精神的および道徳的（心的）な諸特徴が、必然的に政治の方向に幾分影響を与えるに違いないと言うことは、不真面目で愚かなことであろうか（Beddoe 1870: 213）。

すなわち、必ずしもアングロサクソンの優位性だけを語るのではなく、むしろその侵略性を皮肉めるかのようにしつつ、一方で異なる次元としてのケルト性を擁護あるいは賛美しているとも捉えられる。ベドウの位置として、全体としては、ハント、ノックス、デーヴィスから連なる形質人類学者の流れとして科学を社会と繋げる志向に同意しながらも、矛盾ではあるが一方で、ハクスリーとの関連を通して、同時期に英国のケルト周縁地域を評価し始める新しいケルト観の一端を垣間見ることができうる。それはウェールズをはじめとするケルト文学・文化への評価に見る文化的卓越性へのまなざしであったのかもしれない。ベドウは、ケルトに関する科学性と社会性との相関を信じ、その点はハクスリーと異なる見解であったと言えるが、ベドウは、ハントやノックスのような無条件的なケルト批判者・差別主義者ではなかったと言える。

晩年に行われた講演の一つにスコットランドに関するものがある。最終章において「天賦の才能の多様性」（Beddoe 1912: 189）と表現し、人種的議論を包括するかのようブリテン諸島の多様性を語っている。必ずしもアングロサクソンとケルトの二項対立を一面的には論じておらず、多様性という諸次元を語る用語でもって後続につなげたと言えるかもしれない。

## 結びに

本稿で見てきたように、ベドウは、19世紀前半から中盤を経て後半にかけ、議論が繰り広げられたヒトの集団をめぐる三つの学術協会すべてに所属し、知見を深めていった。ヒト集団に関して形質的な特徴など様々な科学性の探求がなされ、また世紀半ばにはダーウィンによる進化論も渦巻く中、この時代に生きた科学者たちは、ヒト集団の理解や人類起源の探求を続けながら既存の概念とともに自らの拠り所を求めようとしたかのようなのである。ベドウは生涯一貫して髪色の研究調査を行ったが、その拠り所として、結果的に属した三つの協会の特徴をすべて包含している。当初属したロンドン民族学協会では、人道主義的な傾向とともにヒト集団の歴史的な起源を求め、次にはより自然科学的な志向においてのヒト集団の理解を求めロンドン人類学協会を設立する他の形質人類学者たちと行動を共にし、これら二者が人類起源をめぐり反目する中、環境要因や進化主義をも取り入れ、極論を展開する二つの協会をやがて合流に導いた。歴史学者ストックキングによれば、当時の詳細の事実を積み上げると、この時代には三つの人類学的な流れが理解できるとし（「より古い民族的伝統」・「新しく現れる人類学的伝統」・「進化論的な伝統」）<sup>8)</sup>、そして、反目する前二者が合流した時には、その過程で両者固有の極端な主張、博愛主義と人種主義が次第に削ぎ落とされた、と彼は興味深い示唆をしている（Stocking 1971: 384-386）。まさに

この示唆の中に「穏やかな物腰」(Stocking 1971: 383)の科学者としてのベドウの重層性を見ることができる。

英国人類学史において、ベドウを始めとする形質人類学者たちの研究は、19世紀前半に新しい科学としての統合をめざす民族学を主張したプリチャードと、現代につながる「文化」概念を初めて同世紀後半に提起し人類単一起源説・進化主義に基づき近代人類学を築いたタイラーとの間の一部を埋めるものである。形質人類学者たちは、ヒト集団への考察の方法として、より自然科学に近づこうとした。多くの形質人類学者が頭蓋指数や頭蓋形、身長などの計測に従事したのに対し、ベドウは、髪と眼の色を観察、集計し、それに基づきヒト集団の存在と移動を論じるという作業を遂行した。この結果、ケルトの英国内での過去と現在の分布について論究することになった。つまり、ヒト集団の主に髪色を捉えメラニン性という科学的指数を編み出した。ベドウの後世に残る独自の研究として、同時代のブリテン諸島における様々なヒト集団を詳細に「観察」してゆきデータから科学指数を示した。そこから導き出されたことは、一つに、歴史的な起源の探求であり、ブリテン諸島では北東から南西に進むにしたがい指数が増加し、アイルランド西部やウェールズ溪谷部、スコットランドのハイランドなどいわゆるケルト周縁地域の黒さが明らかにされ、先住のヒト集団と同定したことである。今一つは、19世紀という同時代の近代工業化や都市化によって周縁諸地域からの人々の移動をイングランド側から見てブリテン諸島内の内なる異民として洞察したものであった。また、後半で考察したように、ベドウと他の形質人類学者との相違点はケルト諸地域をめぐる議論を通して垣間見ることができる。科学と社会という観点からは、19世紀半ばから後半にかけてアイルランドの暴動が激化する中、ハントは文明化したイングランドを頂点とする序列化に基づく科学的人種主義に立ち、人種間の知的精神的能力に差異があるとし、人類多起源説とともにケルト地域の主張を強めた。ベドウも科学としての人種と精神性の一致に同意し、それらを先史のヒト集団として捉えた。しかしながら、ハントらが気候など環境要因を否定したのに対し、ベドウは独自の縦糸と横糸という論理でもって進化主義と遺伝的固定要因を折衷させ、他の形質人類学者とは一線を画した。またケルト諸地域に関しても一部に芸術や文化における熱情への理解やブリテン諸島の多様性として肯定的に捉えようとする言質も見られ、矛盾やアンビバランスも一部に内包しつつ、後続の世代の未来につなげた。

謝辞：本研究は、JSPS 科研費 JR18K00447 の助成を受けたものである。

## 注

- 1) ブリテン諸島 (the British Isles) とは、近年の英国 (ブリテン) 史研究の中で、従来のイングランド中心主義による歴史ではなく、他の諸地域も含め研究する意を込めて使用されている用語である。例えば、『オックスフォードブリテン諸島の歴史』シリーズ全11巻 慶應義塾大学出版会 2009-2015 (*The Short Oxford History of the British Isles* <Oxford University Press,

1998-2004>が刊行されている。全巻を通して「イングランド一國史観を超えて、ブリテン諸島諸地域の構造的関係を視野に、政治、経済、社会、文化の変容を描く画期的通史」と紹介されている。また、周縁 (peripheral, fringe) という用語は、中心部に対する周縁を意味する社会科学用語として使用する。なお、本稿においてはベドウの視点を中心に据えるため、生物学・自然科学的に人間を捉える観点から、より一般的で広範囲な中立的用語であるヒト集団 (human population) を使用する。ただし、文献の中で人種と記載されている個所やその含意で議論がなされる際にはそのまま記す。

- 2) フランスでは、1839年にウィリアム・エドワール (William F. Edwards, 1776-1842) がパリ民族学協会を設立している (竹沢 2005, 2007)。竹沢はプリチャードとエドワールをとりあげ、後にタイラーとモーガン (Lewis Henry Morgan, 1818-1881) により始まった近代人類学の前史として扱っている (竹沢, 2007)。
- 3) レツィウスは、頭示数によりヨーロッパを二型 ('dolichocephalic' type75 以下と 'brachycephalic' type75 以上) に分け、さらに顎の形体を 'prognathous' type, 'orthognathous' type に分けて四象限分類を行った (Stepan 1982: 92)。
- 4) ここでは歴史的起源に主眼が置かれ、特にアイルランド人とウェールズ人を、「最も純粋なイベリア人」としてのバスク人と比較している。
- 5) その他、クロマニオン人とアフリカ型人種との類似性の示唆もある (Beddoe 1885: 10)。
- 6) ジョゼフ・バーナードとデーヴィスとジョン・サーナムは、主にブリテン諸島の頭蓋収集に専念し、1865年に共同で『クラニア・ブリタニカ (ブリテンの頭蓋) — ブリテン諸島の先住民と初期住民の頭蓋の描写と解説』 (*Crania Britannica — delineations and descriptions of the skulls of the aboriginal and early inhabitants of the British Islands*) 2巻を刊行した。外科医であり解剖医であったデーヴィスは、生涯にわたって埋葬塚などから頭蓋と骸骨の収集にあたり1800以上もの観察を行ったとされる。サーナムは精神科医であったが、デーヴィスと出会い頭蓋学の研究に転じた。両者は人類の頭蓋形は異なる人種においては変形しえないという原理に基づき人類多起源説に立ち、主にブリテン諸島の歴史的形成や起源を探求した (Stocking 1987: 66; Stepan 1982: 100)。
- 7) アイルランド自治法案は数度にわたり否決され (1886, 1893, 1912)、1914年に可決されたが、世界大戦を挟み1920年に公布された。グラッドストーンは1868年に政権に就き、アイルランド関連法を成立させていった。
- 8) ストッキングによれば、英国のこの時代に三つの人類学的流れが理解できるという (Stocking 1971: 384)。参考として掲げておこう。一つは、「より古い『民族的』伝統」であり、「すべて人間の集団と一つの固有の起源と関係づける本質的に歴史的な問題の解決において、幅広い大量のデータ — 形質、言語、考古学、文化 — を包含するもの」である。もう一方には、「新しく現れる『人類学的』伝統」があり、「より狭く形質的で、その中心的問題はダーウィン以前の比較解剖学の伝統の文脈において人類の種を定義する種類を等級分けする問題」である。最後は、「『進化論的な』伝統」であり、「ダーウィンの生物学的進化主義の文脈において、先史の人間の遺物の発見によりもたらされる発展上の問題に関心がある」ものである。すなわち、「クウェーカー・福音主義のヒューマニズムの背景を持つ古い『民族学者』」、「過激に人種主義的で、わずかに科学的な『人類学者』」、そして、「神学的に科学的に進み、しかし、その勝利の科学的な確立に密接に結びついていった」「民族学協会内のダーウィン主義者たち」である、としている。

## 参考文献

- Beddoe, John, 1863, "On the Supposed Increasing Prevalence of Dark Hair in England," *Anthropological Review*, Vol.1, No.2 (Aug.), pp. 310-312.
- \_\_\_\_\_, 1865, "On the Head-Forms of the West of England," *Memoirs Autler. Soc.* Vol.11, pp. 348-357.
- \_\_\_\_\_, 1870, "Anthropology and Politics: Kelts and Saxons," *Anthropological News*, *Anthropological Review*, Vol.8, No.29 (Apr.), pp. 211-213.
- \_\_\_\_\_, 1870, "On the Kelts of Ireland," *Journal of Anthropology*, No. II - Oct., pp. 117-131.
- \_\_\_\_\_, 1870-1871, "On the Kelts of Ireland, Abstract and Comment," *Journal of the Anthropological Society of London*, Vol.8, clxxxiii-clxxxiv.
- \_\_\_\_\_, 1885, *The Races of Britain*, Arrowsmith.
- \_\_\_\_\_, 1905, "Colour and Race," *The Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, Vol.35 (Jul.-Dec.), pp. 219-250.
- \_\_\_\_\_, 1912, *The Anthropological History of Europe — Being the Rhind Lectures for 1891*, Paisley: Alexander Gardner (including "Sixth Lecture: Scotland, with General Conclusions" pp. 147-189).
- A. C. H., 1911, "John Beddoe, 1826-1911," (Obituary Notices of Fellows Deceased), *Proceedings of the Royal Society*, Vol. LXXXIV.-B. pp. xxv-xxvii.
- Anonym, 1911, "Dr. John Beddoe, F. R. S.," *Nature*, July 27, pp. 116-117.
- Anonym, 1911, "John Beddoe, M. D. Edn., F. R. S.," (Obituary), *The British Medical Journal*, Aug. 5, p. 316.
- Barkan, Elazar, 1992, *The Retreat of Scientific Racism-Changing concepts of race in Britain and the United States between the world wars*, Cambridge University Press.
- Barnard, Alan, 2000, *History and Theory in Anthropology*, Cambridge University Press (アラン・バーナード・鈴木清史訳『人類学の歴史と理論』明石書店 2005年).
- Curtis, Jr., L. P., 1968, *Anglo-Saxons and Celts*, University of Bridgeport.
- Daniel, Glyn, 2008, "Beddoe, John," *Complete Dictionary of Scientific Biography*, Charles Scribner's Sons.
- Davis, Joseph Bernard and Thurnam, John, 1865 [2017], *Crania Britannica — Delineations and Descriptions of the Skulls of the Aboriginal and Early Inhabitants of the British Islands: With Notices of Their Other Remains*, Volume1, 2, Andesite Press.
- Gray, John, 1911, "John Beddoe, M.D., LL.D., F.R.S., F.R.C.P., Foreign Assoc. Anthropol. Soc., Paris; Corr. Member Anthropol. Soc., Berlin; Hon. Member Anthropol. Soc., Brussels and Washington, Soc. Friends of Science, Moscow," Obituary, Royal Anthropological Institute, *Man*, Vol.11, pp. 151-153.
- Haddon, Alfred, C., 1898, *The Study of Man*, G. P. Putnam's Sons, Bliss, Sands, & Co.
- Hervey, Nick, 2004, "David, Joseph Barnard (1801-1881)," *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press.
- \_\_\_\_\_, 2004, "Thurnam, John (1810-1873)," *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press.
- Hunt, James, 1863, "The Negro's Place in Nature," Memoirs read before the Anthropological Society of London.
- \_\_\_\_\_, 1868, "Knox on the Celtic Race," *Anthropological Review*, Vol.6, No.21 (Apr.), pp.

- 175–191.
- Huxley, Thomas Henry, 1870, “The Forefathers and Forerunners of the English People,” = “Professor Huxley on Political Ethnology,” *Anthropological News*, *Anthropological Review*, Vol.8, No.29 (Apr.), pp. 197–209.
- James, T. E., 1912, “Beddoe, John (DNB12),” *Dictionary of National Biography*, supplement, Smith, Elder & Co.
- Knox, Robert, 1850[2012], *The Races of Man*, Ulan Press.
- Matthew, Colin (ed.), 2000, *The Nineteenth Century The British Isles: 1815–1901 (The Short Oxford History of the British Isles)*, Oxford University Press (コリン・マシュー編 君塚直隆監訳『オックスフォード ブリテン諸島の歴史第9巻 19世紀 1815年–1901年』慶應義塾大学出版会 2009年).
- Murray, Tim, 2014, *From Antiquarian to Archaeologist*, Pen & Sword.
- Ranger, Ronald, 1978, “Race, Politics, and Science,” *Victorian Studies*, Vol. 22, No.1 (Autumun), pp. 51–70.
- Robbins, Keith (ed.), 2002, *The British Isles: 1901–1951 (The Short Oxford History of the British Isles)*, Oxford University Press (キース・ロビンズ編 秋田茂監訳『オックスフォード ブリテン諸島の歴史第10巻 20世紀 1901年–1951年』慶應義塾大学出版会 2013年).
- Stepan, Nancy, 1982, *The Idea of Race in Science*, Archon.
- Stocking, Jr., George, 1968, *Race, Culture, and Evolution—Essays in the History of Anthropology*, The University of Chicago Press.
- \_\_\_\_\_, 1971, “What’s in a Name? The Origins of the Royal Anthropological Institute (1837–71),” *Man*, New Series, Vol.6, No.3 (Sep.), pp. 369–390.
- \_\_\_\_\_, 1987, *Victorian Anthropology*. Free Press.
- \_\_\_\_\_, 1995, *After Tylor — British Social Anthropology 1888–1951*, The University of Wisconsin Press.
- \_\_\_\_\_, (ed.), 1984, *Functionalism Historicized — Essays on British Social Anthropology*, The University of Wisconsin Press.
- White, Elisa Joy, 2012, *Modernity, Freedom, and the African Diaspora*, Indiana University Press.
- 川北稔編, 1998, 『イギリス史』山川出版。
- 竹沢尚一郎, 2005, 「人種 / 国民 / 帝国主義 — 19世紀フランスにおける人種主義人類学の展開とその批判」『国立民族学博物館研究報告』30: 1–55頁。
- \_\_\_\_\_, 2006, 「フランスの人類学と人類学教育」『国立民族学博物館研究報告』31: 57–85頁。
- \_\_\_\_\_, 2007, 『人類学的思考の歴史』世界思想社。
- \_\_\_\_\_, 2009, 「特集：世界の人類学 2 序論」『国立民族学博物館研究報告』33: 301–310頁。
- 平田雅博, 2004, 『内なる帝国内なる他者 — 在英黒人の歴史』晃洋書房。

